

<学術論文>

『信大 YOU 遊』事業が

参加した教職志望学生の適性発達に及ぼす影響

—実践的指導力の観点からの省察文の分析—

土井 進 信州大学教育学部教育科学講座

田中 敏 信州大学教育学部教育科学講座

キーワード：信大 YOU 遊, 実践的指導力, 省察文, クラスタ分析, プロトコル分析

1. 研究の目的

信州大学教育学部において、教職志望学生が中心となり、自発的・自主的に「信大 YOU 遊」という地域貢献活動を実践している。平成6年度（1994, 以下、西暦年数をカッコ書きする）以来、現在まで「信大 YOU 遊」に参加した学生の数は延べ1000名を超えている。そこで、本研究は「信大 YOU 遊」が当の参加学生たちの教職に関連した適性の発達にどのように貢献し、どんな影響を及ぼしてきたのかを探ることを第一の目的とし、この探究を通して「信大 YOU 遊」の20年間にわたる実践を総括し、その意義を明確化することを第二の目的とする。

2. 「信大 YOU 遊」の発足と歴史

「信大 YOU 遊」の活動は、平成6年度（1994）6月6日に開催した「信大 YOU 遊サタデー」から出発した。これは教職に就きたいと念願する学生たち40余名が、既存の教員養成カリキュラムにおける実践的内容の不十分さを（半ば憤りをもって）訴え、“子どもたちとのふれあい”を希求したことを契機とする。このため「信大 YOU 遊」は課程外活動として始まり、その初志から今日に至っても学修上の単位を付与されることなく維持されている。

現在、信州大学教育学部の教員養成カリキュラムは、「教育実習」を中心として子どもに直接かかわる教職科目を1～4年次まで体系的に配置し、これらを臨床経験科目と称している¹⁾。こうした実践的内容を充たす臨床経験科目を体系化する端緒を開き、実践的指導力の養成に向けた教員養成カリキュラム改革の全国的展開の起爆剤となったのが「信大 YOU 遊サタデー」であった²⁾。信州大学教育学部では平成8年度（1996）に、松本キャンパスで履修する1年次生のために、隣接する附属幼稚園・附属松本小学校・附属松本中学校の教育活動に学生が参画する「教育参加」（教職科目第2欄）を開設したが、学部1年次の段階から学校現場に入り幼児・児童・生徒にかかわること自体、従来の教員養成の発想ではどうも考えられないことだった。これを可能にし実現に助力してくれたのが「信大

YOU 遊サタデー」に参加した学生たちの教職への志と情熱であった³⁾。

平成9年度(1997)からは文部科学省による教員養成大学・学部フレンドシップ事業が開始された。このフレンドシップ事業の構想は「信大 YOU 遊サタデー」を一つのモデルにしたといわれる。これに呼応して、信州大学教育学部では、上述の授業科目「教育参加」の内容に長野県教育委員会との連携事業を取り入れ、これをフレンドシップ授業科目として位置づけた。しかしながら、当の「信大 YOU 遊サタデー」の学生実行委員会からは、「信大 YOU 遊」それ自体は“絶対に授業科目にしないでください。私たちは単位が欲しくてこの活動をしているのではありません。”という毅然たる要望があった。その意志を受け入れ、「信大 YOU 遊」は20年間、発足当時の授業外活動のまま引き継がれてきた。

この間、学校教育と教員養成を取り巻く状況は変遷を続け、「信大 YOU 遊」も時代と社会のニーズに対応して思い切った実行組織の改革を繰り返しながら、その時々の実情に即した企画を打ち出してきた：平成13～14年度「信大 YOU 遊広場 (PLAZA)」, 平成15～23年度「信大 YOU 遊世間 (WORLD)」, 平成24年度「信大 YOU 遊未来 (CHANCE)」。そして、現在、表1に示した平成25年度(2013)第20期「信大 YOU 遊未来」が進行中である。

表1 第20期「信大 YOU 遊未来」(2013)の年間計画表

番号	プラザ名・イベント名	活動期間・回数	協働団体・機関等
1	「茂菅」	4/～2/, 11回	J Aながの, 茂菅地区農家
2	「須坂」	4/～2/, 18回	須坂市教育委員会子ども課
3	「青木」	4/～2/, 15回	青木村教育委員会
	青木っこ通学合宿	5/12～5/18	青木村文化会館
4	「湯谷」	4/～2/, 12回	湯谷小学校保護者の会
	湯谷子どもキャンプ	7/06～7/07	妙高自然の家
5	20周年記念シンポジウム	8/10	同実行委員会
6	YOU-YOU キャンプ	8/11～8/14	長野市青少年錬成センター
7	「大岡」	4/～3/, 12回	大岡小学校, 大岡中学校
	大岡わらわら通学合宿	9/22～9/28	大岡老人福祉センター
8	「麻績」	4/～2/, 10回	麻績村教育委員会
	おみっこサマーキャンプ	9/28～9/29	聖山キャンプ場
9	YOU 遊フェスティバル	12/07～12/08	同実行委員会
10	全国フレンドシップ活動	3/05～3/09	青木村・麻績村・湯谷村

(注) 活動回数は各プラザにおいて予定された学生と子どもたちとの交流機会の回数を示す。

3. 研究の方法

3.1 省察文の収集

各年度の「信大 YOU 遊」の活動に参加した卒業生・在校生に、そこで経験したもの、学

んだものについて自己省察を依頼することにした。このため、連絡先住所の知られた卒業生 206 名と在校生 97 名に対して、卒業生には『私の教育実践と YOU 遊サタデー・広場・世間の経験』、また在校生には『臨床経験科目と「信大 YOU 遊世間」から学んだこと』という題目の作文、400 字程度を書いてもらうようお願いした。

収集された作文（以下、省察文）は卒業生で 124 件（回収率 60.2%）、在校生で 64 件（回収率 66.0%）、計 188 件であり、1 件あたりの文字数は概算で平均 520 字、標準偏差 210 字であった。全 188 件の省察文は原文のまま土井（2012）⁴⁾ に所収されている。

なお、「信大 YOU 遊」がその参加者たちに及ぼした影響について、評定尺度や構造化された質問項目を用いた制限回答法によらず、省察文という自由記述を求めたのは、個々の参加者に生じた第一感の影響を参加者自身に選択してもらうこと、そしてその影響内容に端を発して記述される多様な派生内容についても参加者自身の記銘の深さに応じて選択的に報告してもらうことにより探索・発見的な分析を意図したためである。

3.2 評定の観点

収集された省察文において、教職への適性として実践的指導力に関連する内容がどの程度含まれているかを評定することにした。

この「実践的指導力」という用語は、教育職員養成審議会答申「教員の資質能力の向上方策について」（1987 年 12 月）において初めて公的に提言されたものであり、それが含意する概念として、①教育者としての使命感、②人間の成長・発達についての深い理解、③幼児・児童・生徒に対する教育的愛情、④教科等に関する専門的知識、⑤広く豊かな教養、が提示されている。さらに、2012 年 8 月の中央教育審議会答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策」においては、この「実践的指導力」が 16 回も繰り返し用いられ強調されている。

そこで、今日の学校教員に求められる実践的指導力の形成に対して、信州大学教育学部における「信大 YOU 遊」の諸経験・諸活動がどのように貢献しているかを分析することを試みた。このため、実践的指導力として列挙された上記の 5 つの概念を敷衍し、授業の構成単位である子ども・教材・教師の観点別に内容の構造化を図り、さらに「信大 YOU 遊」の活動実態に関連づけて表 2 のような具体的な 9 適性として捉えることとした。これら 9 適性と、上述した実践的指導力①～⑤との対応は表中のマル数字により示す。

3.3 評定の方法

表 2 に示した 9 適性が、各省察文にどの程度表現され含まれているか（以下、含有度という）を次の 5 ポイントで評定することにした：5 「大いに含まれている」、4 「ある程度含まれている」、3 「どちらともいえない」、2 「あまり含まれていない」、1 「ほとんど含まれていない」。

各省察文における各適性の含有度は、3 名の評定者によって独立に評定された。このうち 2 名は「信大 YOU 遊」の過去の参加者としてその趣旨を熟知している者であり、三十代の現職教員と六十代の出版社経営者である。もう 1 名は筆者らのうちの一人である。

表2 実践的指導力に基づいて子ども・教材・教師別に具体化された9適性

I. 子ども（幼児・児童・生徒への共感的理解，人間力，Friendship）	
適性 a	：子どもに教育的愛情を捧げること。友への感謝の念と友情を体験すること ②③⑤
適性 b	：幼児・児童・生徒の成長・発達を信じて待つこと ②③
適性 c	：他者のありのままを受け入れ，心をつなぐこと ③

II. 教材（各教科等の教材研究，学問力，Scholarship）	
適性 d	：各教科等の専門の学問を研究すること ④
適性 e	：地域の人々がどういうことを求めているかを捉えて教材を開発すること ④⑤
適性 f	：子どもがどういうことを楽しいと思っているかを傾聴し，活動を企画・実践すること ②③⑤

III. 教師（教職への深い使命感と強い志，教師力，Educatorship）	
適性 g	：他者に尽くすことを我が喜びとすること。他者への尊敬・畏敬の念をもつこと ①③
適性 h	：内発的な意思と判断に基づいて，主体的に実践すること ①③⑤
適性 i	：教育者としての使命感に燃えること。教職への志を立てること ①

（注）観点Ⅰ～Ⅲのカッコ内はキーコンセプトを表す。

マル数字は実践的指導力5概念（本文中参照）との対応を表す。

表3 実践的指導力9適性の含有度の評定における2者一致数（ $N=188$ ）

適性 a	適性 b	適性 c	適性 d	適性 e	適性 f	適性 g	適性 h	適性 i
135	89	95	137	123	91	73	85	156
71.8	47.3	50.5	72.9	65.4	48.4	38.8	45.2	83.0 (%)

（注）上段の数値はケース数，下段は省察文全件に占めるパーセンテージ。

4. 分析の結果

4.1 実践的指導力9適性の含有度について

各省察文に対する評定者3名の含有度評定において，2者以上が一致したケースが何件あったか（以下，2者一致数）を9適性別に表3に示した。

2者一致の評定値が偶然に現れる確率は36% ($45/5^3=0.36$)であり，表3において適性gの2者一致数(38.8%)はこのチャンスレベルに近い。しかし，2者一致数が次に少ない適性hの2者一致数(85 ケース，45.2%)はチャンスレベルより有意に多く ($p=0.0097$ ，両側検定)，全体的に3者の評定には一定の信頼性が見いだされた。このため2者一致のケースはその一致した評定値を採用し，2者一致以外のケースは3者の評定値のメ

ディアンを採用することにより含有度の評定値を確定した。その結果として、適性ごとに含有度1～5に188件の省察文を分類すると、表4のようになった。

4.2 含有度4・5と評定された省察文の割合について

表4の見出し「4+5」の列は、含有度4・5と評定された省察文の合計数の割合(%)を示す。この合計数を母比率40%(5セル中の2セル分のチャンスレベル)の二項分布により検定した結果、適性a、適性c、適性h、適性iにおいて含有度4・5と評定された省察文が有意に多いことが見いだされた(有意水準5%, 両側検定, 計9回の多数回検定による有意確率の調整にはホルム法を用いた)。

表4 実践的指導力9適性の含有度による省察文の分類 (N=188)

	含有度					4+5 (%)	検定結果
	1	2	3	4	5		
適性 a	1	6	35	36	110	77.7	+
適性 b	19	19	94	37	19	29.8	-
適性 c	11	13	44	84	36	63.8	+
適性 d	116	40	18	11	3	7.4	-
適性 e	76	30	29	43	10	28.2	-
適性 f	10	17	75	47	39	45.7	ns
適性 g	5	7	87	61	28	47.3	ns
適性 h	1	3	68	79	37	61.7	+
適性 i	2	4	30	31	121	80.9	+

(注)「4+5」の列は含有度4・5の合計度数の相対比率(%)を掲示する。

「検定結果」の列は二項検定の結果として+は「4+5」の度数が有意に多く、-は有意に少ないことを示し、nsは有意差が見られないことを示す。

したがって、実践的指導力を構成する9適性のうち適性a(子どもへの教育的愛情や友への感謝)、適性c(他者の受容)、適性h(主体的実践)、及び適性i(教育者としての使命感)に関連する体験や活動を、「信大YOU遊」が参加者たちに特に強く印象づけたことが示唆される。

これに対して、適性b(発達を待つ態度)、適性d(教科専門の研究)、及び適性e(教材開発)については、含有度4・5と評定された省察文が有意に少なかった。これらの適性は子どもとの直接のかかわりを必ずしも前提とする内容ではなく、正課の授業科目の主たる内容といえる。このことは、「信大YOU遊」が既存の教員養成カリキュラムでは十分に学修できない実践的内容を補完することに貢献することを示唆するといえるだろう。

4.3 適性含有度を用いた省察文のクラスタ分析について

次に、個々の適性別ではなく9適性の組み合わせという観点から分析するため、188件の省察文について各適性の含有度を用いたクラスタ分析（ユークリッド距離の二乗値によるワード法）を試みた。その際、表4で見られるように適性aと適性iは含有度の酷似した分布を示し、相関係数も $r=0.47$ とかなり大きく（これ以外は全て $r_s<0.40$ ）、また内容上も適性a「子どもへの教育的愛情」と適性i「教育者としての使命感に燃えること」のように共通性をもつため、クラスタの差別化を図るため一方の適性iのデータを除いて分析することにした。

結果として、図1に示されるような樹形図が得られ、樹形の高さ（図中のHeight）の立ち上がりから6クラスタが適切と考えられた。これら6クラスタ（以下、クラスタI～クラスタVIと記載する）のそれぞれの特徴として、各クラスタに入った省察文の件数、及び各クラスタの省察文が含む適性a～hの含有度平均を表5に示す。

各適性の含有度平均について6クラスタ間で分散分析を行った結果、全ての適性において有意であり（ $p_s<0.006$ ）、多重比較（ t 検定、有意水準5%、調整後 p 値による両側検定）の結果、各適性で表中のアンダーラインを付けた平均がその数値未満の平均よりも有意に大きいことが見いだされた。

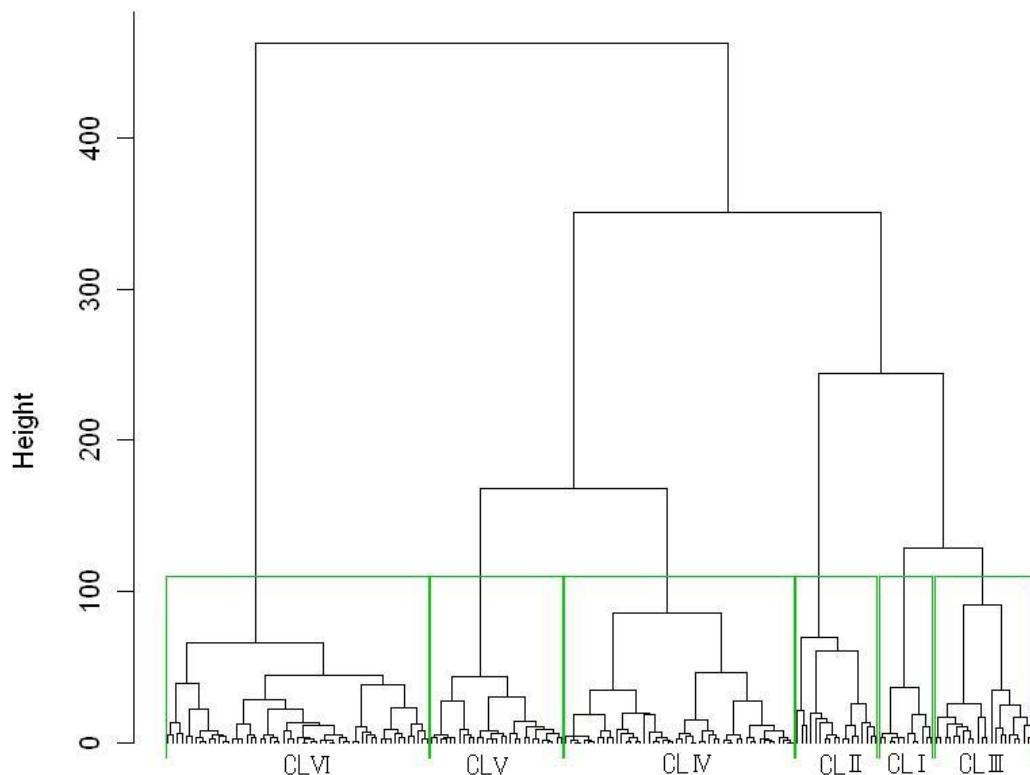


図1 クラスタ分析による省察文（N=188）の樹形図

（注）CL#はクラスタ番号を示す。省察文番号は省略。

『信大YOU遊』の教職適性発達に及ぼす影響

表5 各クラスタにおける省察文の件数と各適性の含有度平均

	CL I	CL II	CL III	CL IV	CL V	CL VI
省察文の件数	12	18	22	50	29	57
適性 a の平均	<u>5.00</u>	4.06	4.14	3.82	<u>4.83</u>	<u>4.51</u>
適性 b	2.08	1.56	2.59	3.14	<u>4.14</u>	3.42
適性 c	2.17	2.44	3.05	3.78	<u>4.21</u>	<u>4.16</u>
適性 d	1.08	1.44	<u>3.55</u>	1.30	1.45	1.49
適性 e	2.17	2.17	2.55	1.24	1.35	<u>3.91</u>
適性 f	<u>4.50</u>	1.67	4.00	3.08	<u>4.21</u>	3.58
適性 g	<u>3.83</u>	2.78	<u>3.77</u>	3.22	<u>4.17</u>	3.56
適性 h	<u>3.83</u>	3.28	<u>4.09</u>	3.64	<u>4.07</u>	<u>3.81</u>

(注) アンダーラインを付けた平均は分散分析後の多重比較の結果として

アンダーラインの付いていない平均より有意に大きいと判定されたもの。

5. 各クラスタの特徴づけと省察文のプロトコル分析

以下、各クラスタの特徴について各適性の含有度から記述する。そして、当のクラスタに含まれる代表的な省察文について、そのプロトコルを分析する。なお、記述中の含有度の数値は表5に示された平均値である。

5.1 クラスタⅢとクラスタⅥについて

クラスタⅢは、全体では極めて含有度の低かった適性 d（教科専門の研究）について特段に高い含有度 3.54 を示した（他クラスタは 1.50 未満）。同様に、クラスタⅥも全体として含有度の低かった適性 e（教材開発）について他より数段高い含有度 3.91 を示した（他クラスタは 2.54 以下）。

さらに、両クラスタとも子どもへの愛情や自主的・主体的態度に関連した適性（a, h）の含有度も高いほうである。したがって、クラスタⅢ、クラスタⅥの省察文は、感性や態度の適性を確かな基盤を築いたうえで、実際の教育活動を志向するという段階を表現しているといえる。

たとえば、適性 d（教科専門の研究）が表現されたクラスタⅢの文例は次のようなものである。

YOU 遊サタデーで得た事で、現場で役に立っていると感じた事は、段取りの大切さです。「籐かご作り」の講座を開くための籐材の買い付け、道具の準備、編み方の説明書づくりやスタッフ向けの講習会など、講座を進めるための段取りを全て考えました。念入りに準備したおかげで、講座の当日はすっかり先生の気分で、楽しみながら子どもたちに教えることができましたのでした。このような力はまさに学校での日々の授業を組み立てることと同じでした。予備実験をもとにしていかに当日をイメージできるかが、授業にとっても必要なこと

なのだということを、身をもって学びました。この経験があったからこそ、教えることに対して自信がつき、教員になることにも自信がついたのだと思います。(p. 55, in クラスタⅢ, 冒頭のページ数は土井(2012)⁴⁾における所収ページを示す。以下同様。)

ここで用いられている“予備実験”(プロトコル中の語句は“ ”で示す。以下同様)という表現は、まさに研究用語である。この“予備実験”から本実験(当日の本番)へという手順は、専門研究の手続きとして学ばれたのではなく、「信大 YOU 遊」の活動を通して体験的に“段取り”として身に付いたものである。もちろん「信大 YOU 遊」の中では「これこれを身に付けなさい」という場面は登場しない。にもかかわらず、ここでは本人自身がそこに教育研究のノウハウがあることに気づき、本人自身がそれを学ぶべきものとして志向するという自律的過程が生じている。

同様に、適性 e (教材開発) が強く表現されたクラスタⅥの省察文は次のようなものである。

教職 9 年目の今、YOU 遊広場で経験しておいて良かったなと思うことがある。それは、「いろいろな立場の方との交流」である。YOU 遊広場の活動では、自分の願いを実行に移す中で、農業や福祉、教育などに携わる方から協力をしてもらった場面がたくさんあった。協力を得るには、自分の思いを伝えたり、相手の立場を考えたり、深く関わり合うことが必要だった。その中で気づいたことは、「どんな立場の人でも『子どもの育ち』を願っている」ことである。その根っこが同じだからこそ、多くの方が学生であった私に惜しめない協力をしてくださったのだと思う。教師として子どもの前に立った今も、その気付きが生きている。教育は一人ではできない。大勢の方からそれぞれの専門を生かして、子どもたちとかわかってもらっている。「どんな立場の人でも根っこは同じ。私の子どもに対する思いをしっかりと伝えることができれば、みんなが心強い味方に成ってくれる。」そう考え、いろいろな立場の方に協力を得ながらの毎日である。(p. 71, in クラスタⅥ)

このプロトコルでは、地域の人々との“交流”による講座の企画が述べられている。「信大 YOU 遊」は地域貢献活動として、地域の人々の支援と協力をお願いする講座も多い。子どもとの直接のかかわりあい、そのためには地域の人々との直接のかかわりあいもまた必須となることを参加者たちは企画段階からの作業を通じて自然に体験する。“いろいろな立場の方”“大勢の方”との直接のかかわりあいは、子どもに接する前段の教育研究に特に不可欠である。そのことが「信大 YOU 遊」の講座の企画において体験的に印象づけられ、後年、“教育は一人ではできない”という認識につながったものと考えられる。

5.2 クラスタⅠとクラスタⅤについて

クラスタⅠ、クラスタⅤの省察文は、上述したような教育的応用の内容までは含まれていないが、その分だけ感性・態度に関わる適性がより強く表現されていた。特に、クラス

『信大YOU遊』の教職適性発達に及ぼす影響

タ I は適性 a (子どもへの教育的愛情や友への感謝) の含有度が全件 (N=12) で満点 5.00 を示した。また、クラスタ V も 6 適性で含有度 4.00 以上を示し、最も多面的に「信大 YOU 遊」の影響を受けているといえる。

まず、適性 a (子どもへの愛情や友への感謝) が強く語られるクラスタ I から次のようなプロトコルを例証として引くことができる。

私は 1 年生の時から YOU サタに参加していましたが、2 年生になって運営に関わるようになって驚いたことがありました。それは、受付はもちろん安全面やけがのことなどについて、こと細かく参加者のことを考えた仕事を学生が考えてやっていたことです。子どもたちが来れば、駐車場から受付の場所まで連れ添って案内し、一日の活動が終わって保護者の下に帰るまで、子どもが安心して遊べるように様々な配慮をしていることにとっても驚いたのです。一回一回の活動が終わるたびに反省会を行い、十分な計画だと思っていたことの中に足りなかったことがあったことを振り返り、次回には新たな視点を配慮事項として取り入れていったことが、学生としての研修だったのだと思います。

(p. 51, in クラスタ I)

ここでは、子どもへのひたすらの愛情に止まらず、実際に子どもを安全に駐車場から迎えて安全に保護者の手に返すまでの“驚く”ほど徹底した細心の配慮と“一回一回のそのたびごとの反省会”が強い印象をもって語られている。子どもを愛することとは、どういうことなのか。そのためには教師として何に気を配らなければならないのか、何を考えなければならないのか。そうした教師の適性を自分なりに明確にしようとする意識化・自覚化が、このプロトコルには見いだされる。

同じような意識化・自覚化が、クラスタ V の省察文にも見いだされる。多数の適性で高い含有度を示したクラスタ V の代表的文例は以下である。

「やらないって言ったのに。」YOU 遊世間では数々の活動に参加してきたが、この一言だけは今でも忘れられません。その日は、麻績村で鬼ごっこの企画をやっていたのですが、天候などから指示が二転三転するということがありました。「もう一度鬼ごっこをしよう」と私が言うと、先ほどの言葉が返ってきたのです。ほんの数秒の些細な場面でしたが、当時の私は衝撃を受けました。まるで子どもの気持ちを裏切ってしまったように感じたのです。それ以来、私は「一貫性」という言葉をいつも意識するようになりました。私は小学校 6 年生の担任をしています。考え方の違った人間が一つの学級集団を作っていくのですから、担任の私は、一つのを貫く必要があると思うのです。YOU 遊世間でも学校現場でも、目の前にはいつも本気の子どもたちがいます。だからこそ、今の自分が真に信じることを貫きたいと思います。(p. 93, in クラスタ V)

ここでは、明確に“一貫性”“一つのことを貫く必要”という自ら遵守すべき基準が意識化されるようになったことが述べられている。しかも、この意識化は「信大 YOU 遊」の実践の中で、子どもの一言から、いわば一期一会の“衝撃”として起こったということが注目される。

前段のプロトコルとあわせて、これらクラスⅠとクラスⅤの省察文では、それぞれ異なる感性・態度の適性が表現されているが、両者に共通する特徴としてそうした感性・態度適性に対しての明確な意識化・自覚化の進展が挙げられる。

5.3 クラスⅣについて

クラスⅣは、全適性が含有度4未満、そのうち6適性が含有度3点台であり、顕著な強弱が見られない。このクラスの実態については、次の2件のプロトコルから推して知ることができるだろう。

信州大学の中でも教育学部は、地理的には観光名所の善光寺と並ぶが、観光客はそれが大学だとは気づかないような小さなキャンパスである。その中でも一際目立たない教室N308に、YOU 遊世間という世間が長野中に広がっている。そのYOU 遊世間の魅力は、私たちがすることは私たち自身で決め、それをやりたい人がやる場であることにある。そして、それが重要である。私はYOU 遊フェスティバルで講座を開かせてもらった。本当にやりたいと思う人が集まり、信頼し合い、言い合い、そして高め合えば、その集団には莫大なエネルギーが発生する。後はそれをやりたいと思うことに注げばよい。これが、私がYOU 遊世間から学んだことである。(p. 101, in クラスⅣ)

友人とご飯を食べに行くとき、これまでの私は特に自分の意見を述べることなく、相手の行きたいところに行くことが多かった。自分の意見を言ったとき、相手に何か思われるのではないだろうか、消極的に考えてしまっていたのである。そんな私が大学時代、YOU 遊世間に会い、そこで活動していくうちに変わっていった。そこには、自分の意見を持ち、仲間と熱く語り合う人たちがたくさんいた。圧倒された。衝撃を受けた。「こうなりたい！」と強く思った。私は「自分を持つ」ことの大切さ・楽しさ・魅力を感じたのである。自分の道は、自分の意思で切り拓く。YOU 遊世間でのこの学びが、現在の私の生活を実のあるものにしてきている。(p. 103, in クラスⅣ)

上掲の2件のプロトコルをみると、確かに特定の適性に関する明確な記述はないが、それは各適性が十分に育っていないということではない。前者では“やりたいと思う人が集まり、信頼し合い、言い合い”，そして“莫大なエネルギーが発生する”という表現において「自分たちに何かが起こる」という強い確信が述べられている。また、後者でも“自分をもつことの大切さ・楽しさ・魅力”という特定されない一般的な表現ではあるが、確信的に「自分自身がこれから変化する」ことへの強い期待が述べられている。

このように両者とも、教師としての適性の意識化・自覚化には至っていないが（6適性で含有度3点台に止まった）、それぞれの適性が今後伸長する基盤的土壌が確保されたことに多くの言を尽くしている。このように、何かが起こり、何かが変化し育つことへの確信と期待は、「信大YOU遊」が参加者の精神性の発達に及ぼす初期的効果として解釈することができるだろう。

「信大YOU遊」の精神は「やりたい学生が、やりたいことを、やりたいようにやる」という参加学生に対する完全な受容と肯定である。そこに教員がいて参加学生に何かしらの教授が行われるということは全くない。学生自身が自主的に動き変化しようとする意志をもたなければ学修も発達も生じないという実践の場である。教師としての適性には、そうした自主的・自律的な実践を通してしか育たないものがあるだろう。そのような適性の発達に貢献するという点に「信大YOU遊」の意義の一端があり、それがこのクラスタIVにおいて見られたといえる。

5.4 クラスタIIについて

最後に残ったクラスタIIは、6つもの適性が含有度3未満であり、「信大YOU遊」の影響が最も狭く極限されて表出されたグループである。唯一、適性a（子どもへの教育的愛情や友への感謝）のみが含有度4.00を超えている。クラスタIIの省察文から次のものがその典型例として挙げられる。

教員9年目になりました。初任のころ「大好きなYOU遊の活動が仕事になった」と感じたのを思い出します。「子どもたちとできるだけ楽しいことをしたい」という思いは、今も学生時代と変わりません。そして、YOU遊をやっていたからこそできたと思う、私の実践がいくつもあります。YOU遊や全国フレンドシップ活動で出会った仲間とは、今も頻繁に連絡を取り合っています。仲間の実践を聞いて学んだり、自分も負けずにがんばろうと元気をもらったり。これからもずっと、共にがんばっていきたいと思います。

(pp. 71-72, in クラスタII)

この文章が例示するように、とにかく“子どもたちとできるだけ楽しいことをしたい”という「まず活動ありき」「まず子どもたちとの楽しいかかわりありき」が「信大YOU遊」の精神である。まさにそれが「信大YOU遊」を創始した第一の理由であり、「信大YOU遊」が実現を目指した第一のものである。こうした直接経験・実践経験が教職のどんなノウハウや適性と結びつくかは第二の問題であるといっても実は過言ではない。

その意味で、適性aに集中したプロトコルこそ、「信大YOU遊」の存立理由と意義を端的に表現してくれているものである。子どもたちとの直接のかかわりあい、その実践的体験は教職を志すための始点になると同時に、また教職に就いてから以後も常に立ち戻ることができる自己自身の原点となるだろう。

6. まとめ

各クラスタの特徴づけと省察文のプロトコル分析から、「信大 YOU 遊」が参加者の実践的指導力の適性発達に及ぼした貢献は、次の4つの内容にまとめられる。すなわち、①感性・態度適性を基盤とした専門研究・教材開発の志向（5. 1 参照）、②特定の適性の意識化・自覚化（5. 2 参照）、③各適性の発達の確信と期待（5. 3 参照）、④子どもたちとの直接のかかわりあいという原点の確認（5. 4 参照）である。

これら「信大 YOU 遊」の4つの影響は、参加者個々人の印象や記憶として述べられたものであり、必然的な前後関係を示す証拠はないが、上述した①～④は一定の完結した精神性の形成過程（マル数字の逆順に進行する）を表しているとみなすことができるのではないだろうか。「信大 YOU 遊」がそうした実践的指導力の適性の発達の始まりから終わりまでの進行に寄与する活動と実体験を提供しうることがここから推察される。

全体としては、「信大 YOU 遊」は適性 a（子どもへの教育的愛情や友への感謝）、適性 c（他者の受容）、適性 h（主体的実践）、及び適性 i（教育者としての使命感）の自覚と発達を参加者たちに促したことが示唆された（4. 2 参照）。繰り返しになるが、これらの適性は、やはり座学としての授業では育成困難なものであり、もし実際にそうした授業についての省察を出席者に求めてみても、上述した適性とその省察文の中で語られることはほとんどないだろう。

以上、本研究は「信大 YOU 遊」の20年にわたる実践活動の総括として、その参加者の実践的指導力の諸適性に及ぼした貢献を探索し、析出してきた。ここで実証された「信大 YOU 遊」の効果の解釈とその意義は、「実践的指導力の向上は、“実地指導”や“実務に従事、参加”させることによってだけ期待されるのではなく、同時に、いやそれ以上に、実践者自身の主体的、自主的な理解や判断や決定を助長する働きかけや方向づけによって期待される」という高久清吉（1990, p. 8）⁵⁾の言に尽くされる。

「信大 YOU 遊」の事業18年の実践記録を出版した際には、三重大学名誉教授・齊藤昭氏より「信大 YOU 遊」は「信州教育の宝であると同時に、それを越えた普遍的・国民的教育として真に有効な教育の方法である」⁶⁾という過分な言辞を寄せていただいた。しかしながら、もし、そうした“普遍的・国民的事業”としての意義を「信大 YOU 遊」が持ち得られるなら、それは一重に「信大 YOU 遊」に参加した学生たちの根底に流れる、「信州教育」の精髓と通底する不屈の教育者魂によるものであることを、本稿を閉じるにあたり一言付記しておきたい。

文 献

- 1) 臨床教育推進室編『臨床経験ハンドブック ―いま ここから―』 信州大学教育学部（2006）
- 2) 高倉 翔『「実践的指導力」育成と「教職科目」改革の先駆的实践』 土井進編『教員

- 養成フレンドシップ事業「信大 YOU 遊」18 年の教師教育研究』 信州大学教育学部 p. 9
(2012)
- 3) 土井 進『平成 8 年度 臨床経験の授業科目「教育参加」の開設と学生の反応』 信
州大学教育学部附属教育実践研究指導センター (1997)
- 4) 土井 進編『教員養成フレンドシップ事業「信大 YOU 遊」18 年の教師教育研究』 信
州大学教育学部 (2012)
- 5) 高久清吉『教育実践学 ―教師の力量形成の道―』 教育出版 (1990)
- 6) 齊藤 昭『外部よりの評価として』 土井進編『教員養成フレンドシップ事業「信大
YOU 遊」18 年の教師教育研究』 信州大学教育学部 p. 6 (2012)

<Article>

Effects of "Shinshu University YOU-YU" Project
on Development of Student Teaching Aptitudes:
Analysis of Participant Reflection Reports in Terms of Practical Teaching Ability

DOI Susumu Faculty of Education, Shinshu University
TANAKA Satoshi Faculty of Education, Shinshu University

(2013年11月28日 受付)
(2014年 1月 9日 受理)